

平成 28 年度第 1 回秋田県水産振興協議会 議事要旨

- 1 開催日時 平成 28 年 10 月 5 日 (水) 13:30～15:20
- 2 開催場所 ルポールみずほ 3 階 ゆりの間
- 3 出席者 加藤委員、藤田委員、柴田委員、小玉委員、柳原委員、古宇田委員、河内委員、渡部委員 (代理：男鹿市農林水産課 武田課長)、横山委員 (代理：にかほ市農林水産課 佐々木課長補佐)、藤田委員 (代理：工藤専務理事)

【事務局】水産振興センター柴田所長、齋藤室長、水谷部長
水産漁港課千葉課長ほか各班長及び担当職員

4 議 事

- (1) 平成 28 年度施策・事業の実施状況について
 - ア 水産漁港課関係
 - イ 水産振興センター関係
 - ウ 新型交付金 (地方創成推進交付金) 活用事業
- (2) 平成 29 年度新規事業計画案の概要について
- (3) 全国豊かな海づくり大会の開催決定について

上記の議事についての質疑応答・意見等は次のとおり。

■議事 (1) アを説明した後の質疑応答

委員：漁協が行っているハタハタの直売について、我々もスーパーマーケットで小売りをしているなかで、より鮮度の良いものを売ってみたい。流通がわかりにくい部分もあり、どのようにすれば新鮮なハタハタを入手できるものなのか、教えていただきたい。

事務局：本事業のなかで、県漁協からもっと大きな容器にハタハタを入れて、そのまま、スーパーさんに持ち込んで直売できないかを検討した経緯がある。運ぶための装置、容器の回収システム、新しい売り方ができていない為、対応できないのが現状となっている。実際に対面販売するには、生産者の方が居て、食べ方や加工処理の指導すべきだが、この時期、一番の繁忙期であるためスーパーの方々とはタイアップして行うことができれば良いと思っておりますので、そのようなアイデアをいただければありがたい。

委員：ハタハタの時期になると、つける用のハタハタ寿司を求めるのだが、どのタイミングで購入すれば良いのか、いつ頃入荷するのか等の情報をテレビ等のメディアを通

じて情報提供してもらいたい。色々な所が連携して、一体感を持って情報提供してもらい、庶民を巻き込んだ取り組みを進めてほしいと思います。

事務局：ハタハタについては、ここ数年資源量が減少している状況が、新聞各社やマスコミで報道されている所である。毎年10月の末にハタハタの資源対策に関する協議会のなかで、季節ハタハタの資源量や初漁日情報が流れる様になっている。12月いっぱいまで旬の時期が終わってしまうため、店頭に並んだら早めに求めていただければと思う。メスから順に出荷されるが、オスが手に入りにくいこともあり、昨年からは県漁協の職員が直売（対面販売）等を行ったところ、県民の皆様に喜ばれた。今年も事前にPRして、直売を行う予定と伺っている。

委員：昨年は、資料の写真にある様な北浦での直売が好評であった。由利の方では時期になれば、それなりに手に入る様に準備している所である。先ほど話があった様に、例えば500kgのハタハタをどのような方法で、店舗に運ばばよいのか等工夫が必要であり、善処していきたい。

委員：NHK等の報道で、「そろそろハタハタが捕れそうです」的な、そういうものを少しアナウンスしてもらいたい。

事務局：ハタハタは、騒がれはじめ、店舗に出始した様だと思う機会に、小売店に来店してもらえれば、求められる。

委員：季節ハタハタの漁は1ヶ月近くあり、12月の初旬に求めてもらうのが確実な所。マスコミの方々は、漁が始まる頃からバンバン取材に来て、放映してくれる。今後とも出せる情報はどんどん出していきたい。

委員：担い手育成について、先ほど入門、実践研修参加者のうち各1名の辞退があったが理由は何か。

事務局：入門研修者は、朝時間までに2回ほど来れず、キツさついていけなかったもの。実践研修者は、作業中に腰を痛めて、1ヶ月間 船から降りたらその後乗船する気がなくなってしまったもの。

委員：今回実施した漁業体験研修の対象や参加者は、例えば水産高校生とか、どういう年代の方々なのか。

事務局：募集チラシを東北各地の道の駅や県内のハローワーク、図書館等の公共施設で配布した。年齢構成は、20歳から59歳迄の方々に、幅広く参加してもらった。研修の様子を新聞記事やテレビ放映で、何回も紹介されたところである。

委員：この間「キラリ」という民放の番組の「漁業版」に男鹿海洋高校の生徒出ていた、国際教養大学の学生も漁業に興味があつてきたとの内容だった。農業よりもさらに魅力があつていい感じでしたが、どういう理由で漁師への道に入っていないか（ちゅうちょ）するのか。

委員：本校では、漁業にあこがれる高校生が少なからずいる。今年も県内2名、県外2名が就職先として内定している。県内に漁業就業した場合の一番の問題点は、本当に少ない所得しか得られず、しかも月々の所得が安定しない事。漁業だけで一生、所得を得てやって行くのが厳しいというのが実態である。確かに漁師は、大漁時に歩合がもらえる事が普通のサラリーマンとは違う楽しみや喜びがある。一生懸命頑張っても対価がないので、所得を求めて、結局県外へ出て行ってしまいう傾向にある。そこが、本県の漁業振興の難しさであり、これが現実であると認識している。出来れば、若い人達に直接生活支援のサポートをしてくれる様な支援や制度があればとどまって、漁師や水産業をやってくれるかもしれない。

委員：担い手の受け入れに際し、初心者からは始める場合のサポート体制や2年に渡たる長期研修を行っている例もあるようだが、どのようにして着業や定着に結びつけているのか。

事務局：各研修等の受け入れに当たっては、相手方からどこの地区で、どういった漁業をやりたいのかという希望や意向を確認する。個人差があるが、大別すると研修後にそのままそこで働く雇用型と独立してもらいやり方がある。

委員：研修性を受け入れる場合、あらかじめ漁師等に働きかけをしているものなのか。

事務局：各地域の先達の漁業者は、地域のリーダー（立派な方）を選んでいる。人を雇えるような体力（経営力）を持った方に、大切な研修生を預かり育ててもらいたいと考えている。研修生としても、研修後にそのまま雇用を希望する方が多いのだが、現実的にはマッチングがなかなかうまくいかない状況である。

■議事 （1）イを説明した後の質疑応答

委員：参観デーは、毎年土曜日にやっているのか。

事務局：小学生が夏休みに入り、最初の土曜日に開催するケースが多い。

委員：参観デー「海藻おしば体験」をNHKでやっていて、すごく楽しそうで子供たちの顔がいきいきしていたのを見て、ふれあうことが大事だと感じた。とても良いこと。

委員：アワビの増養殖技術の確立は、水産振興センターでいつまで行うのか。

事務局：今年度（平成28年度）中に行う予定としている。

委員：秋田のトラフグは、下関（山口県）に出荷されている様だが、秋田産として出荷されているのか。あっちに持って行って下関産で言われたら悲しいんですけど。

事務局：秋田県としては、「北限の秋田ふぐ」として売り込んでいるが、実態として漁獲次期

の関係から他県に出荷した方が、漁業者の身入り（所得が）多いとなればその評価や判断が難しく、県があまり介入できないことでもある。

■議事 （1）ウを説明した後の質疑応答

委員：農林水産業一体となって、1年間生活できるよう同伴型（組み合わせ）考えてみてはどうか。その為にも農業と林業に水産業を加えて幅広く体験できるような研修システムを考えてはどうか。

事務局：先般、八峰町で開催された漁業就業体験研修のフィナーレにおける意見交換では、研修生から今の話とも通じるようなすどい質問が寄せられた。心の中にあった今のご提案を委員から頂戴した。一番の課題は、農業・林業・水産業に分かれている業態をどのような形で、どこが統括していくのかということがあります。現実問題として、半漁・半農でやっている方がおりますので、ご提案については、これから検討させていただきたい。

委員：農協等の組合団体が示す営農（漁業経営）指導により、いくら稼げるのか。

事務局：漁協では、農協等が示す「営農類型」にあたるものが提示できておらない実態にあり、林業も同様と伺っているおり、今後、農林水産業全体をご提示できるような形で頑張っていきたいと思う。

■議事 （2）を説明した後の質疑応答・・・質疑なし。

■議事 （3）を説明した後の質疑応答・・・質疑なし

■その他

事務局：平成28年度の第2回目の協議会を平成29年3月に開催予定である。

以上